終戦70年 体験を語る ③

長崎原爆

昭和20（1945）年8月9日。6日の広島に続いて、長崎に原子爆弾が投下された。長崎市北部の松山町上空約500㍍で炸裂、約7万人もの尊い命が奪われた。あの日、学徒動員で爆心地に程近い場所で被爆した2人に体験を語ってもらった。

今も忘れられない悲鳴と絶叫

森永 正人さん「生きながらえていることが…」

「原爆による被爆者という事実は、長い間誰にも話すことのできない大きな秘めごとになっていた。戦後50年が過ぎ、学生時代の同期で被爆の事実を伝える冊子を作った。その頃から被爆について話せるようになった」

森永正人さん(87、長崎市・大光寺門徒)は17歳の時、爆心地から南に1・2㌔の三菱長崎兵器製作所茂里町工場で被爆した。事務見習いとして魚雷の部品造りに携わっていた。「あの頃は空襲警報が鳴るたび避難していた。作業に取り組む状況ではなく、敵機が襲来しても迎撃に向かう日本の飛行機は来ない。敗戦の様相がはっきりしていたように思う」。

9日の朝は快晴だった。出勤前に敵機を見たが、偵察機だと思ったという。昼食準備をしていた時、ラジオが島原上空をアメリカの戦闘機が通過したと報じた。その時だった。

午前11時2分。「写真を撮る時に使うフラッシュを何万発もたいたような、今までに見たことがない強烈な閃光にさらされ、世の中が真っ白に見えた。と同時に、数メートル吹き飛ばされ、工場の壁にたたきつけられた」。もうろうとする意識の中、工場の鉄骨はアメ細工のように折れ曲がり、電線が何本も垂れ下がっているのが見えたという。

全身に負ったケガと出血は、逃げてきた友人に言われて初めて気が付いた。「流れ出る血がベルトのところにたまり、固まっていた。頭にはガラス片が刺さったままだった。痛いという感覚はなく、足に巻いていたゲートルで止血し、友人と一緒に工場から逃げた。路面電車は黒焦げ。家畜も焼け焦げていた。倒壊した家屋の下から『助けて』という声を聞いたが、どうすることもできずに踏み越えて逃げた。あの時の悲鳴と絶叫は今も忘れることはできない。今、生きながらえている自分が後ろめたい気持ちになる」。

被爆体験を語る森永正人さん（左）と大光寺の三浦達美住職

小高い丘から浦上駅方面を望んだ光景は一面の焼け野原。「すぐに広島に落ちたのと同じ新型爆弾だと思った。丘には高射砲の陣地があり、裸で作業をしていた人たちは、熱線による大やけどで腹部や背中に大きな水ぶくれができていた。破れた皮膚を身体にはり付けようとしていた人もいた」。

救護所で応急手当てをしてもらい、必死の思いで自宅まで歩いた。約4㌔の道のりだったが、9時間もかかったという。家は爆風でガラスが割れて足の踏み場もないほどだったが、無事だった家族と再会を喜んだ。

「兄が戦死し、あの戦争は大切な家族を奪った。何より許されないのは原子爆弾。核兵器は人類の滅亡につながることを全人類に意識してほしい。破壊力がわかっていながら、再び造るのは人間の愚かさ。時間が経つことで、世間からはその恐ろしさが忘れられていくが、私は忘れることはない」

爆心地、父は死体を探し回った

村上 妙子さん「長崎を最後の被爆地に」

森永さんとは爆心地を挟んで北側に位置する三菱長崎兵器製作所大橋工場で学徒報国隊として働いていた村上妙子さん（87、長崎市・発心寺門徒）。爆心地から1・3㌔、当時17歳だった。

あの日も魚雷を製造する工場の2階事務室にいた。「『パーン』か『キーン』という耳をつんざくような音がしたので、外を見ようと窓を見た瞬間、青白い光に襲われ、爆風とともにガラスが割れ、吹き飛ばされた。大学生が気絶していた私を起こし、背負って山の方へ連れ出してくれた」。その後、村上さんは一人で諫早に避難し、救護所で手当を受けた。

「父が迎えに来てくれたのは8月12日頃だった。それまで生き地獄を見てきた。爆風で腹部に重傷を負った女性の側で泣きすがる赤ちゃん、焼けただれた人、うめき声をあげ苦しむ人、声が静まったと思うと亡くなっていた人…。亡くなった人をゴザにくるんで縛って運ぶ様子に、私も死んだらああなるんだと思って見ていた。爆心地に近かったため、父は私がもう生きてはいないと思い、死体を探し回っていたと話してくれたが、その道中で見た光景については多くを語らなかった」

取材当日、村上さんに大橋工場のあった場所まで同行してもらった。現在は長崎大学となっており、その校門前には当時の写真が入った銅板の記念碑があった。「これが私がいた工場なんですね。こんな風になっていたとは…。この屋根の下辺りに私がいたと思います。ここにね…。あんな惨いことを二度としてはいけません。長崎が最後の被爆地であってほしい」と静かに語った（写真）。